

看護系修士課程の分担授業におけるIBDL方式試用の事例 (2002年度後期)

華表 宏有

聖隷クリストファー大学看護学部

Case Report on an Attempt to Employ an Internet-Based Distance Learning (IBDL) System in a Class of a Nursing Science Master's Course Taught as a Shared Responsibility (2nd Semester in 2002 Academic Year)

Hiroaki KAHYO

Seirei Christopher College Department of Nursing, Hamamatsu, Japan

抄 録

本学の看護系大学院（修士課程）で、2002年度後期に分担した「看護研究方法Ⅱ」での非同期型IBDL方式の継続試用の経過と授業アンケートの回答を中心に報告した。あわせて「看護管理論」の分担授業でのeメール活用によるIBDL方式の試用を報告した。

授業アンケートでは、受講者全員が「看護研究方法Ⅱ」の分担授業から修得したことがあると回答し、eラーニング推進の意義、必要性を肯定的に受け止めていることが確認された。

キーワード：看護教育、生涯学習、遠隔授業、非同期型IBDL方式、
eラーニング

さきに筆者¹⁻⁴⁾は、本学の看護系大学院（修士課程、1学年の定員10人）で分担している「看護研究方法Ⅰ」（1年前期必修、2単位30時間）と「看護研究方法Ⅱ」（1年後期選択、2単位30時間）で、2001年度から「長期在学コース」（注1）が導入されたことを契機に、学内HP（ホームページ）に電子掲示板「大学院生の広場」（以下広場と略称することがある）を設置して、非同期型（asynchronous）の「インターネット活用による遠隔授業」（Internet-Based Distance Learning/IBDL）方式を試用した経緯を報告した。

本稿では、引き続き2002年度後期に分担した「看護管理論」（1年後期選択、2単位30時間、筆者の分担は7コマ14時間）と「看護研究方法Ⅱ」（筆者の分担は4コマ8時間）で、電子メール（以下eメール）と電子掲示板を適宜に活用したIBDL方式による授業を推進した事例を報告する。

受講生の概略と授業方針の決定

1998年度以降、看護系の学外非常勤講師1人と分担してきた「看護管理論」で、2002年度の受講者2人（うち1人は2001年度入学の長期在学コースの院生）は、中国地方内陸部と中京地区からの長距離通学者であったため、今回はじめてこの分担授業で、もっぱらeメールを活用した非同期型IBDL方式を試用した。（注2）

一方「看護研究方法Ⅱ」の受講者8人（男性1人、女性7人）は、全員が2002年度の新入生で、別報⁴⁾でも述べたように、7人が有職者（6人が看護教育、1人が看護業務に従事）で、うち3人は関西・中京地区から新幹線利用の長距離通学者である。入学時点での年齢は、平均年齢が40.9才で、最低29才から最高55才となってお

り、前年度と比較して4才ほど平均年齢が高くなっている。（注3）これら8人の受講生は、前期で分担した必修科目「看護研究方法Ⅰ」（筆者の持ち時間は7コマ14時間）の受講経験者であり、前年度後期の経験²⁾をふまえ、同じ教材⁵⁾を使用し、具体的な授業の進め方を検討した。

後期に筆者が学部の授業で担当する科目には、「疫学」（2年必修、2単位45時間）と前期から継続している「個人研究セミナー」（2年必修、通年で1単位45時間）があり、全体の時間配分などを考慮して、大学院で分担する2つの科目については、まず「看護管理論」の授業をIBDL方式（もっぱらeメールを活用）で行い、そのあとで「看護研究方法Ⅱ」の授業を電子掲示板「広場」を主体とし、これにeメールを併用したIBDL方式で実施することとした。

「看護管理論」でのIBDL方式適用の経過

この科目での分担授業を、最終的に非同期型IBDL方式で実施することにした理由は、前述のように、当該年度の受講者2人が長距離通学者であったことである。また電子掲示板を設置しないで、eメールのみを使用する方式を採用した根拠は、「看護研究方法Ⅱ」で使用する「広場」との重複・混同を避ける意味と、受講者が2人であることからeメールだけの活用でも、かなりの教育的効果が期待できるのではないかと判断したからである。

7月下旬（注4）に、筆者の学内用HPにA4判2枚にまとめた「分担授業の進め方」（オリエンテーション）を掲載した。項目を列挙すると、はじめに、教育目標（注5）、学修目標（注6）、資料、実際の手順、最終レポートの提出である。

この分担授業で、受講者が夏期休暇中に自主

学修することを期待した教材は、資料として提示したWHO欧州事務局（WHO/EURO）のHP（<http://www.who.dk/>）に掲載されている看護・助産関連領域の文献（注7）で、それを幅広く検索・閲覧して、この科目の主題と自分の興味とが合致したテーマを選定するように指示した。（注8）

7月下旬に学内用HP上に提示した「実際の手順」（オリエンテーション資料）では、11月下旬を目途として、各自のレポートをまとめて筆者宛にeメール添付で送付し、それに基づいて、独自の電子掲示板を設置して週末の3日間（金・土・日）を活用したバーチャル・セミナーを延2回行う予定とし、具体的な日程は後日相談の上で決定するとしていた。しかし、後期での授業日程を具体的に再検討した結果、「看護管理論」独自の電子掲示板を設置する煩雑さを念頭に、eメールによる相互連絡でも、十分に一定の教育効果を維持することが可能ではないか、さらに専らeメールを使用する授業方式の試用も必要ではないかと最終的に判断した。そのほかeメールによるバーチャル・セミナーの期間を当初予定していた3日間から1週間（火曜から翌週の月曜まで）に延長した理由は、週末の3日間に受講者2人（いずれも看護教育に従事）に、ほかの用務が入る可能性を考慮したからである。

以上のような検討過程を経て、後期授業の開始された10月初旬に、A4版1枚に「当該科目の分担授業の進め方」（確認事項）で、7月下旬のオリエンテーションと異なる点（注9）、具体的な日程（注10）、取り上げるテーマ、履修評価の方法（注11）、授業アンケート（注12）、注意事項（注13）を列挙して学内用HPの所定箇所に掲載した。

あらためて「取り上げるテーマ」について述べると、7月下旬のオリエンテーションでは、

WHO/EUROの該当資料が閲覧できるURLを提示し、その中から各自が選定した文献1篇について、レポートを作成（注14）する課題だけを提示したが、その後の検討から、前後2回実施するeメールによる意見交換のための2種類の素材（注15）を具体的に追加した。実際にメーリング・リストを活用したeメールによる前後2回の意見交換で取り上げられた内容は、1回目は厚生労働省のHP（<http://www.mhlw.go.jp/>）に掲載されている「新たな看護のあり方に関する検討会」（医政局看護課所管）のそれまでの議事録と資料を閲覧した感想、2回目は筆者が参考までに、夏期休暇直前に配布した別冊（注16）に目を通した読後感で、それぞれ自分の経験・考え方をふまえてA4版1～2枚に要約して、メーリング・リストで相互に伝送する方式で行ってみた。

受講者の1人が「看護研究方法Ⅱ」の方も受講するため、時間的な重複をさけることも考慮しながら、もっぱらeメールで相互の連絡を取り合って、所定の課題3種類を、特別の支障をきたすことなく、11月中旬までに予定した全日程を消化することができた。

ただしこの分担授業では、授業アンケートを実施しなかったため、この方式についての受講者側からの意見聴取が欠如していることを認めなければならない。実施しなかった理由は、受講者が2人であり、匿名性の確保が困難のため、率直なコメントが返ってこない可能性を想定したからである。

「看護研究方法Ⅱ」のIBDL方式授業開始までの経過

この科目の分担授業で、電子掲示板「広場」を使った非同期型のIBDL方式を試用するのは、

前年度に引き続いて2回目となる。受講者8人は、すでに前期の分担授業「看護研究方法Ⅰ」で、この方式を経験⁴⁾しており、授業の進め方を若干変更した以外は、教材なども前年度とまったく同じものを使用して実施することにした。

まず7月下旬、A4版3枚に記した「分担授業の進め方」(オリエンテーション)を「大学院担当科目のページ」に掲載した。項目を列挙すると、はじめに、教育目標(注17)、学修目標(注18)、テキスト⁶⁾および指定論文⁵⁾、授業の進め方、受講前の準備、履修評価の方法、課題の提示、授業アンケートの実施と最終レポートの提出である。同時に指定論文⁵⁾を自主学修していくための「『課題論文』演習の進め方」(指針)(注19)を掲載した。

後期授業の始まった10月初旬に、受講者の注意を喚起する意味を含めて、同じく「大学院担当科目のページ」に、A4判1枚以内にまとめた「分担授業の進め方」(具体的日程)を掲載した。この際「広場」への掲載にあわせて、メーリング・リストを使ったeメールによる連絡を併用した。(注20)

この科目の分担授業の進め方であるが、前述した「看護管理論」のeメールによるIBDL方式授業を終了したあと、まず課題A(注21)と課題B(注22)をそれぞれ11月25日(月)と11月27日(水)までに提出してもらい、11月29日(金)早朝から12月7日(土)深夜までの延9日間、指定論文⁵⁾を素材として「広場」を使った実質的な問題提起と討論を行うこととした。課題A、課題Bともに期限までに8人全員から提出され、課題Bの模式図は、予定通り「ラウンド」開始の2日前に、メーリング・リストを使って受講者に転送することができた。

このための電子掲示板「大学院生の広場」

は、11月上旬に電算センターに依頼して、「大学院担当科目のページ」の所定箇所(左上隅)に設置してもらった。(注23)今回の広場は、「はじめに」、「ラウンド」、「おわりに」の3つのグループから構成することにした。「ラウンド」での実質的な討論に入る前に、「はじめに」で簡単な挨拶、コメントを書き入れてもらい、最後の「おわりに」でも広場での討論を終了した意志表示として、何か一言書き入れてもらった。また今回は「ラウンド」での書き込み数に最低基準を設定しないで、各自の自由に任せる方式を採用してみた。

「看護研究方法Ⅱ」での「広場」への書き込み状況

表1は、電子掲示板「広場」への書き込み数を、3つのグループ別に示したものである。受講者8人で69、筆者(HK)が27、合計96であった。この中で、実質的な討論を行っているのはラウンドでの書き込みで、受講者8人で51、筆者が15、あわせて66(全体の68.8%)であった。

表1 電子掲示板「大学院生の広場」へのグループ別書き込み数

	受講者(8人計)	HK*	計
はじめに	10	11	21
ラウンド	51	15	66
おわりに	8	1	9
計	69	27	96

注)HKは筆者を表す、以下同じ

表2は、9日間連続して実施した該当ラウンドでの書き込み状況を、経日別、個人別に示したものである。最も書き込みの多かった時期は、5日目(火)で6人が延14書き込んでいる。続いて6日目(水)も6人が延12書きこんでいる。また8

日（金）の書き込みはなかった。火曜日の夕刻から別の科目で講義があったため、ほぼ全員が登校しており、この日は院生自習室のPCを使って書き込んでいることが想像された。

個人別の書き込み状況を見ると、最高17から最低2（平均6.4）とかなりのばらつきがみられた。（注24）担当者である筆者の書き込みは、毎日1～2回記録されている。

表3は、該当ラウンドでの書き込み状況を時間帯別、個人別に示したものである。受講者8人合計でみると、最も頻度の多かった時間帯は15～18時（29.4%）、続いて21～24時（25.5%）となっている。これは受講生の一人（L）が、火曜

日夕刻からの講義前に院生自習室で集中的に書き込んだため、この数値を除外すると夜間の時間帯（21～24時）で延5人が入力しており、前期⁴⁾と同じ傾向を指摘することが可能である。筆者の場合は朝の時間帯（6～9時）が最も多く、つづいて夜間（21～24時）となっている。

参考までに「はじめに」と「おわりに」をあわせた場合の時間帯別書き込み状況を、受講者合計と筆者に分けて示したのが、表4である。表3と表4を合計して時間帯別の書き込み状況を見ると、受講生8人計で、69回のうち22回（31.9%）が夜間（21～24時）に打ち込まれ、もっとも頻度が高くなっている。一方筆者の場合は、6

表2 該当ラウンドの日別、個人別の書き込み状況

	初日(金曜)	2	3	4	5	6	7	8	最終日(土曜)～	計
I	1	3		1	1	3	4			13
J						1	2			3
K					2	2				4
L					8	3	4		2 (1)**	17
M					1	1				2
N		2	1							3
O		2			1					3
P				2	1	2	1			6
計	1	7	1	3	14	12	11		2 (1)	51
HK	2	2	1	1	1	2	2	1	3 (1)*	15
合計	3	9	2	4	15	14	13	1	5(2)	66

注)括弧内の数字は最終日を過ぎてからの書き込み数を示す *は翌日 **は翌々日

表3 該当ラウンドでの時間帯別、個人別にもた書き込み状況

	0～3時	3～6時	6～9時	9～12時	12～15時	15～18時	18～21時	21～24時	計
I	1			1	4	1	3	3	13
J					1		2		3
K					1			3	4
L					4	11		2	17
M	2								2
N						2		1	3
O						1	2		3
P	1						1	4	6
計	4 (7.8)			1 (2.0)	10 (19.6)	15 (29.4)	8 (15.7)	13 (25.5)	51 (100.0)
HK		1 (6.7)	9 (60.0)					5 (33.3)	15 (100.0)
合計	4 (6.1)	1 (1.5)	9 (13.6)	1 (1.5)	10 (15.2)	15 (22.7)	8 (12.1)	18 (7.3)	66 (100.0)

表4 「はじめに」と「おわりに」のグループでの時間帯別にみた書き込み状況(2つのグループを合計している)

	0～3時	3～6時	6～9時	9～12時	12～5時	15～18時	18～21時	21～24時	計
受講者(8人計)	1 (5.6)		1 (5.6)	2 (11.1)	2 (11.1)	1 (5.6)	2 (11.1)	9 (50.0)	18 (100.1)
HK			6 (50.0)	1 (8.3)	2 (16.7)			3 (25.0)	12 (100.0)
合計	1 (3.3)		7 (23.3)	3 (10.0)	4 (13.3)	1 (3.3)	2 (6.7)	12 (40.0)	30 (100.0)

ー9時の時間帯に27回のうち15回(55.6%)書き込まれている。

おわりの表5は、該当ラウンドでの書き込み状況を、コメントが付けられたか(その場合何回コメントがあったか)、あるいは単発のままであったかを知るためにまとめたものである。最初の書き込みは24回あり、うちコメントのなかったのが7(29.2%)で、残り17(70.8%)では最低1から最高5までコメントが付けられている。

表5 該当ラウンドでのひとつの書き込みに対するコメントの数の分布状況

コメントの数	該当数	書き込み数の合計
0	7(29.2)	7
1	8(33.3)	16
2	1(4.2)	3
3	3(12.5)	12
4	2(8.3)	10
5	3(12.5)	18
合計	24(100.0)	66

コメントのあった書き込みのテーマを列挙してみると、「ところで、模式図つて何?」、「分析方法について」、「SASEについて」(注25)(以上コメント数5)、「模式図の感想です」、「研究期間について」(同じく4)、「内的妥当性に関すること、疑問など(その2)」、「介入について」、「標本について」(同じく3)、「J論文の研究的な特徴は?(研究方法について)」(同じく2)、「使用した尺度について」、「Q3の内的妥当性についてです」、「内

的妥当性に関すること、疑問など(その1)」、「Q8測定」、「研究対象者について」、「禁煙教育の費用効果について」、「お名残惜しいですね」(同じく1)となっている。

授業アンケートの内容

12月初旬、該当ラウンドの終了直前に「大学院担当科目のページ」に最終課題テーマ(注26)を掲載したほか、メーリング・リストを用いてeメール添付で授業アンケート(注27)を受講者全員に送付した。匿名性を確保するため、回答はいったん特定の院生にeメール添付で送り、8人分をまとめて筆者宛に転送してもらった。

以下Q1からQ4までの回答の全文を示す。

Q1;この「看護研究方法Ⅱ」の分担授業で、前期に続いて2度目の「eラーニング」(ここでは「インターネットを活用した非同期型の遠隔授業方式」を指している)を経験したことになります。最も印象深かったことを、ひとことでコメントしてみてください。

- ①コメントを書くには、文献を見る必要があり、なかなか時間をとりました。特に、統計学の参考書は、かなり取り揃えてみましたが、(多変量解析の話し、数字のわかりい……、その他)、いずれもわかりにくく難儀をしました。
- ②統計学の知識、研究の基礎的知識など学生間

でレベルの差がありますが、よくわかっている優秀な学生がコメントを返し、教えてくれたので学び合いができたと思います。

- ③いつでもできる便利さと、だからこそ、後回しになってしまうこともあること。通学することは大変ですが、その時間は勉強だけの時間になります。しかし、自宅からのeラーニングは、いろいろなしがらみに邪魔されることが多く、夜中を待っている間に眠ってしまって困りました。
 - ④理解度の差が書き込みを通して、あまりに明らかになってしまうこと。しかし、この差を克服しようと自己学習意識が大変高まった。これは、書き込みに表れない自己習得と感ずる。
 - ⑤今回は、忙しく、なかなかアクセスできませんでした。
 - ⑥初めて、このような「eラーニング」での授業方式を体験できて、インターネットを使用する機会が増え、PCがより身近に感じられるようになった。インターネットを使用しての他分野の情報を検索する機会も増えた。
 - ⑦インターネット上での討論よりも、それ以前に論文を読み、分からない点について自分なりに調べ、理解できるようになってきたことが最も印象深い。
 - ⑧時間に関係なく、それぞれの院生の意見を聞くことができることや、自分の疑問に思っていることを、他の院生が質問していることなどから、様々な意見が聞けることが面白く、ためになった。
- Q2：この分担授業では、量的研究の英語論文1篇を教材として、論文の構成（*課題B）とそこで使用している研究方法を中心に「広場」で討論したほか、双方向性の多肢選択問題（*課題A）を行いました。この分担授業か

ら、あなたは何か修得したことがありますか？（2肢選択、該当するほうに○印をつける）

- 1. はい、修得したものがある。 8人
 - 2. いいえ、修得したものはなし。 該当なし
- SQ：具体的にその内容・理由などを教えて下さい。（できれば列挙して下さい）
- ①1) 課題Aでは繰り返し出てくる設問があり、その中でも、頻繁に出る設問は重要な内容であろうと予想がついた。
 - 2) 論文の構成を書くことが、論文の全体を理解し、クリティークするには、とても参考になることが理解できた。
 - 3) これからも研究を行うにあたり、概要を图示し、全体像を常に把握したいと考えている。
 - ②J論文はわかりやすい文献でした。課題の模式図を書くことによって研究の全体がわかりましたし、他の学生の模式図を見て、自分の足りないところや誤りに気づくことができました。しかし、前回も思いましたが、Q1から順を追って進めることができれば、より確かな知識になったと思います。
 - ③量的な研究がこんなに奥深いものだとは思いませんでした。研究の方法をどのレベルまで記載するのか、なぜその測定用具を選択したのか、グループ間の比較方法は妥当かなど、いままで自分がそこまで意識した事がなかったことを反省させられました。
 - ④1) 模式図作成のために、パソコン技術が上がった。
 - 2) 討論で出てきた準実験における基礎的知識
 - ⑤模式図を書く際に、いろいろな条件に曖昧な点があったので、そのことについて、みなさんの意見が伺えたこと。
 - ⑥1) 量的研究を実施する研究方法・分析方法を

論文を通して学修することができた。

2) 「広場」を通して、他の院生が指摘していることなど、後でゆっくりと考えることができた。ほとんど、他の院生から学ぶことが多かった。

3) これまで看護研究をほとんど実施せず、看護活動が実践のみに終わっていたので、論文を批判的に読む機会がなく、論文を批判的に読む視点が学修できた。

4) 看護研究を実施するために、自分の不足している学修課題が明確になった。

5) 英語の論文を使用しての学修機会もなかったため、英語の論文の訳の方に時間がとられて、論文を批判的に読むことに時間がかかってしまったが、今後海外の文献検索の良い機会となった。

⑦1) 統計的手法の適用や方法、結果の読み方について理解できるようになった。1つの論文をじっくり読み、論文中にある統計的手法について、その適用や方法、分析の結果の読み方について学習することができ、これまで曖昧だったものが理解できるようになった。

2) 論文を批判的に読む時の様々な視点を知ることができた。批判的に見ているつもりであったが、討論を通し、これまで自分の見方が十分でなかったことや、様々な視点が必要であることを知ることができた。

⑧1) 論文を読む上で、どこに視点を持って読み進めていく必要があるのか。

2) 上記から、批判的に論文を読むということについて、前回の看護研究方法Ⅰよりも理解が深まった。

Q3：昨年度につづいて、今年度も前期・後期の分担授業で「eラーニング」方式を試用いたしました。後期の分担授業を体験して、よかった点、または改善すべき点などありました

ら、具体的な提言を含めて記して下さい。また通常の教室内での対面授業と比較した場合の利点と欠点についてのコメントでも結構です。

①前期と同様に、「広場」で交流したのは、問題提起とその問題に関する反応の把握でした。把握された問題に対して検討を深めるには、eラーニングで出された問題を持ち寄って、皆で集まって討議する時間があるとさらによいと考えた。eラーニングだけでは、まだ、討議が中途半端であったり、関心が向かないことにはあまり反応がなかったりするので、学習内容にばらつきが生じる恐れがあること、eラーニング上でのやりとりに深まりがない場合があること、等である。特に、重要な学習課題では、eラーニング後のclass conferenceがあるとよいのではないかと考えた。しかしeラーニングは、学生が自立的に学習すること、学習のペースを自らの時間にあわせて作れるなど利点も多い。

②2回目とあってEラーニングに少し慣れました。今回は先生にもコメントをいただきました。何が本当に正しいかわからないので、先生にも討論の中に入っていただけたら、より確かなものになるのではないかと思います。

③教室では、他の学生の発言に対し、即座に対応できないこともあるけど、eラーニングでは、他の学生の意見を確認した後で、自分なりに調べてから発言することができる。ただ、生の発言と異なり、文字に表現しにくいものはニュアンスが伝えにくい。中期と最終ぐらいには、学内での授業を確保した上でのディスカッションが必要である。

④自分がわからないことでも、「広場」の書き込みを見て、その後の自分なりの学習につながる事ができた。量的研究の理解に関して

は、現時点での差は歴然としており、その差をどのように埋めていくかは本人次第ではあるが、自分の修論のテーマにより、量の研究の理解度をどこまでに自分が持っていかは、本人まかせになっていると感じた。夜間の自分の自由な時間を使って参加できる事は有りがたかったが、書き込むためにはそれなりの勉強が必要であり、書き込みまでの勉強時間数は相当になるように思う。

⑤1) よかった点；言葉で話すのとは違い、一度言語化されるので、自分自身の考えをもう一度確認できる点。また、そのことが、記録として残っている点。

2) 改善すべき点；セキュリティと、プライバシーについてが今後の課題であると思う。

⑥利点；1) 遠隔授業は、遠方の私にとっては、わざわざ出かけなくても学修できるのでよかった。また、自分の空いた時間でゆっくりと学べることは良かった。

2) 「広場」などでの皆さんの意見をあとで何度でも熟考することができた。

欠点；1) 疑問点など、すぐ口頭で確認したいことが、聞けない。また、どうしても文章にするとニュアンスが異なる場合がある。（表現の仕方が苦手のせいでしょうか）

2) パソコンの機種が古いせいで、うまく作動できなかったところもあった。

⑦良かった点；論文をじっくりと読み、それについて自分なりに調べ学習していくことができた。

改善点；討論が十分に行われなかった。問題提起があっても、それについていろいろな意見交換が行われることを期待していたが、問題提起だけで終わってしまっているものが多かった。問題にも重なりがあり、意見を述べるだけで討論にまでは至らなかったものが

あった。「eラーニング」という方法の中で、意見交換・討論ができるような改善が望まれる。

⑧利点；1) 時間に関係なく、いつでも疑問を投げかけることができる。

2) それぞれに、いろいろな意見がもらえ、様々な視点を持つことができる。

3) いろいろと調べてから、質問に答えることができる。

欠点；1) 他の人と同様の疑問を持った場合、その疑問が先にでていと書き込みが少なくなったりする可能性はあると考える。

2) 前回と同様、タイムリーでない返答となってしまう可能性がある。

Q4：生涯学習時代といわれております。看護系大学院（修士課程）では、有職者や遠距離通学者の比重が増してくるに従って、「eラーニング」を積極的に取り込んだ授業方策を開発していく必要があると考えておりますが、この点について、あなたの1年間の受講体験（前期と後期）をふまえながら、自由にコメントしてみてください。

①eラーニングは、今後さらに活用されることを望みます。米国・シアトルの大学では、看護学部編入の学生はeラーニングが中心でした。そのためのアドバイザーシステムが充実し、トレーニング、パソコンのメンテナンスなどを大学が十分にサポートしていました。Eラーニングは、学習者の自立的学習を助長すること、利便性があること、などの利点がある一方で、面接のような人間関係を有する討議とその深まりや満足感（情緒的問題にもなりますが）にやや欠けるような気がします。eラーニングを有効に活用するには、eラーニング後のfollow up classを1回でも設けてははいかがでしょうか。さらに、eラーニングを大学院の

教育システムとして取り入れて継続していただくために、ぜひ、学習者のパソコンへのサポート体制を学内で充実していただきたいと思います。今年度は、2年生に教えていただいたので、大変助かりました。でも、私は、次年度の方をサポートできるか不安です。

- ②いまやIT時代ですから、教育界でも今後ますますこのような教育方法がとられていくと思います。得手、不得手はあっても克服していかなければならないと思います。修士課程は自ら学ぶところですから、統計学や研究の基礎ができていない学生にとっては、このような学習方法は適しているかもしれません。しかし、私のように能力に差があると十分に理解できないし、消化不良を起こしてしまいます。
- ③仕事に就いているからこそ、問題や目的意識が芽生え、学習意欲が高まるのだと思いますが、有職者が学ぶにはまだまだ環境が整わない時代です。“仕事を止めることが出来ない人にも学ぶ機会を”とするには、eラーニングは意義深いと思う。でも、この方法だけではすべてを学ぶことは難しい。
- ④自宅にいながらの、大学院レベルの討論に参加できる事はありがたいと思った。交通費はかからないし、移動のために費やす時間を勉強のために使えることは、いい面が多いように感じる。しかし、大学院で華表先生の講義を受けたという実感が持てないのは、大学院に入りながら、残念な気持ちがある。
- ⑤インターネットに接続できる環境があれば、操作に関しては、以前に比べ、容易になってきているように思う。インターネット上の仮想空間を使って、何を学ぶのかについては、さらに熟慮されていく必要があると思う。また、書き込み以外の方法も利用できると思う

ので、他のリソースについても、検討の余地があると感じている。

- ⑥華表先生が実施されたこのような授業形態は、これから益々増えて行くことが予想されます。私もこのような授業形態で、他分野でも学べる機会があれば体験したいと、今は思っています。この授業形態のおかげで、本当に遠距離の私には、有り難いものでした。そして、1年間で皆さんからの様々な知識をアドバイスいただきました。最後に、華表先生有り難うございました。
- ⑦1年間「eラーニング」の授業に参加し感じたことは、インターネットを使用し、いつでもどこでも参加できるということの便利さ以上に、参加するためには自己学習がいかに必要かということである。インターネットでの討論は最終的な場であり、それまでには討論に参加できるように、自分なりに学習し、準備しておかなければならない。それができていなければ、この方法による学びは中途半端なものになる。学習者の意識によって学びの深さが変わってくる学習方法であると感じた。「eラーニング」という授業方法は、自分で学習し、学習したことについてネットでやりとりすることで確認し合い、自分の見方や考え方を修正したり、深めていくことができることから、自己学習を促す場合や独学・遠距離で集まって討論できない場合の方法としては有用であると思う。
- ⑧実際に様々な利点と欠点はあるが、遠距離や、有職者にとっては時間の都合を無理につけなくてもよいということは、非常にありがたい。授業に参加もしやすいと考える。ただ、自分で調べることが前提ではあるが、資料や文献の情報をすぐに得られないということや、その資料を提示されてからそれを得

て、調べて書き込みをするということに関わる時間を考えると、対面授業のように“学校”という場所にいるという利点もあるものとする。それぞれ利点はあるが、今の修士課程の体制（有職者の受講）を考えると有効な授業方法であるとする。

以上授業アンケート（Q1～Q4）での回答内容を、原文のまま掲載した。

考 察

1. eラーニングの推進とその背景

本稿で試用した「非同期型IBDL方式による授業」形態は、いわゆる「eラーニング」と総称される「IT（情報技術）によるコミュニケーション・ネットワーク等を使った主体的な学習」の一種で、「eラーニング白書」⁹⁾の分類では、同期型遠隔講義やテレビ会議などとは異なり、学習時間の自由度が高いものとして位置づけられている。（注28）双方向性（interactive）を備えた「eラーニング」、その中でも学習時間の自由度が高い非同期型のIBDL方式（注29）が注目されている背景には、ITの飛躍的発展によるネットワーク社会が形成されてきたことのほか、グローバル時代における生涯学習の必要性が社会のさまざまな領域で認識されてきた現実がある。

わが国の少子高齢社会で、益々増大する保健医療領域の人的需要に対処するため、過去20年あまり看護専門職の養成、さらに質的向上の課題は国家的事業として取り組まれてきた。こうした社会的要請に沿って、本学は従来から存在していた看護系短期大学に加えて、1992年に看護大学を開設し、さらに1998年に大学院看護研究科（修士課程）を設置した。そして2001年度には修士課程への有職者の就学を容易にする目

的で、「長期在学コース」（注1）が導入された。前回報告¹⁾した通り、2001年度の新入生9人のうち4人が有職者で、他の1人を含む5人が長期在学コースへの在籍を希望した。現実問題として新入生9人の構成から、時間割の編成・調整問題が表面化したのは、自然の成り行きと言っても過言ではなかった。新学期直前の研究科委員会での審議をふまえ、特にその中の1人が長距離通学者（注3）であったことを直接の誘因として、筆者の分担授業については、電子掲示板を使用した非同期型IBDL方式を試用することを決意した。¹⁾

つづく2002年度の新入生8人の構成をみると、本稿の冒頭に述べたように7人が有職者で、うち3人が長距離通学者であった。過去5年間（1998～2002年度）の大学院課程への入学者の構成を、初期の3年間（注30）と「長期在学コース」導入後の2年間を比較すると、後者では有職のまま入学した院生が両年度とも過半数を占めていることが注目される。とりわけ新幹線利用の県外からの長距離通学者が少数とはいえ存在する現実には、カリキュラム編成面での一層の検討と配慮が、本学の修士課程への志望者を確保する上にも、具体的な戦略課題となってきたことが注目される。

従来通りの教室での対面授業形式を採用するとすれば、週日の夜間開講、土・日開講、休暇期間中の集中講義、あるいは長距離通学者を配慮して、JR浜松駅近辺にサテライト教室を設置することなどが考えられる。（注31）過去2年間の実績をみると、これらの代替的選択肢の中で、最も可能性が高く、実際に具体化されたのは、土曜の午前・午後を使った授業が中心であった。しかし全員の都合がいつも土曜でよいとは限らず、担当者と有職者である受講者相互の調整問題が全くないとはいえなかった。

長距離通学の有職者を含んだ受講者を対象とする大学院レベルでの授業を、より円滑に進める上で、対面式授業への参加が困難な場合には、非同期型IBDL方式による授業の併用・推進が期待されるわけであり、いわゆる「eラーニング」が、看護教育においても新しい課題^{10、11}として表面化してきた必然性が指摘される。

全国レベルでこうした社会的要請が強くなっている代表的事例として、国立保健医療科学院 (<http://www.niph.go.jp/>) では、3年間の予備的試行をふまえて、2002年度後半から「インターネットによる遠隔教育」(注32)を開始した。現場の公衆衛生従事者を対象とし、長期間職場から離れることなく、それぞれの持つニーズに対応した生涯教育の支援強化事業として、この活動が近い将来軌道に乗ることが期待されるわけである。

以上のように、eラーニング推進についての社会的要請に沿って、本学の大学院でも、筆者の分担する科目に限定してではあるが、電子掲示板と電子メールを活用したIBDL方式の試用が開始された。本稿で報告する事例は、2年目後期(4番目の Semester にあたる)のものである。以下今回の事例を素材として、いくつかの点を挙げて考察する。

2. 具体的な進め方と内容について

今回は、昨年度と同じ「看護研究方法Ⅱ」のほか、「看護管理論」の分担授業も非同期型IBDL形式で実施した。その理由は前述したように、この科目の受講者2人が、いずれも長距離通学者であったことである。また最終的に電子掲示板ではなくeメールを伝達手段として使用したのは、同じ Semester で分担する「看護研究方法Ⅱ」の「広場」活用との混同を避けるためもあった。2人の受講者を対象に、独立した電子掲

示板を設置する手間を考えると、むしろeメールの簡便性を選択するほうが現実的であったといえる。

学部での担当や学会出張の日程(10月下旬)などを考慮し、また筆者と受講者双方(2科目受講する院生が1人いる)の負担を平均化するために、上記2科目の分担授業が重複しないようにした。12月中旬までに大学院の分担2科目を終了するようにしたのは、1月には学部担当2科目(疫学と個人研究セミナー)の最終試験、レポート提出が予定されていたからである。

10月中旬から11月中旬まで延2回、「看護管理論」で提示した2つの課題(注15)について、受講者2人からメーリング・リストを使ってeメール添付でA4判1~2枚程度に要約したコメントを送ってもらい、その直後に課題のレポート(注14)を同じくeメール添付で提出してもらった。受講者が2人で、しかもeメールによる伝達方法を採用したため、十分な討論ができたとはいえないが、予定した日程を特別の支障を来さずに消化することができた。ただこの分担授業については、当初から授業アンケートを実施しないことにしていたので、受講者側の感想を引き出すことはできなかった。メーリング・リストを使ったeメールによる方法と電子掲示板による方法との教育効果、満足感などの比較検討は、今後の研究に待たなければならない。

「看護研究方法Ⅱ」では、11月下旬、まず課題A(注21、注33)と課題B(注22)を筆者宛eメールに添付して提出してもらい、うち課題Bについては、受講者8人分を一括して、あらためてメーリング・リストで全員に転送した。つづいて9日間の電子掲示板「広場」を使った問題提起・討論を実施した。その状況は表2から表5に示したとおりである。昨年度²⁾と違って、今回は該当ラウンド期間中に、学外から「広場」へ

のアクセスができないという突発事故はなかった。当然のこととはいえ、こうした事故が起きた場合の対処策をあらかじめ用意し、受講者の不利益にならないような柔軟な対応が求められている。学内LANの保守管理を担当する電算センターへの緊急報告と原因究明のための情報収集と具体的対策のほか、場合によっては当該ラウンドの期間延長などもありうるので、1週間程度の予備的時間を確保しておくことが必要かと考えている。また全期間をとおして受講者側から、コンピュータウイルスによる事故の報告はなかった。

ここで今回の「広場」での書き込み状況について若干ふれてみよう。前期では「広場」を6グループに区分（注34）したが、後期は表1のように3つのグループにした。「はじめに」と「おわりに」は、受講者各自が「広場」での書き込みのあいさつと終了の意思表示のために設定しているので、全体の流れを円滑に進めるために不可欠な要素だと考えている。今回の事例では1人が「はじめに」で3回入力しているが、これは該当ラウンド開始前の緊急連絡に活用しているもので、「おわりに」を含めて、ほかはすべて1回の書き込みですませている。筆者の「はじめに」での書き込みが11と多くなっているのは、事前の連絡事項や準備の進捗状況などを、このグループにも入力して、連絡の徹底を図っているためである。

実質的な部分は「ラウンド」であり、今回の場合、表5のようにこのラウンドでの書き込み数は66で、最初に項目を立てて入力した回数は24であった。うち最低1回以上コメントがあった項目は17（70.8%）である。掲示板での問題提起・討論の密度をはかるための指標として、コメントのあった項目の比率、コメント数の分布（注35）などが挙げられるのではないかと考え

ている。今後の事例を積み重ねる過程で、電子掲示板上の問題提起・討論の状況（密度）を、これらの指標を使って比較検討することも可能かと考えている。またそこで取り上げられたテーマは、表5の補足説明として列挙したように、かなり広範囲にわたっている。本稿では、その具体的内容の分析まではしていないが、基本的には院生相互間の自発的な討論に期待しており、必要と判断した場合のみ、簡単なコメントを追加する程度とした。こうした経験から、IBDL方式による授業での担当者の役割と実際の入力（タイミングと内容）について、さらに経験を蓄積しながら検討することが重要であることを、あらためて自覚することになった。しかし、大学院レベルでの授業では、IBDL方式を採用する場合でも、受講者相互の活発な討論を引き出し、盛り上げていく基本原則を堅持することが重要であると筆者は考えている。

今回は、昨年度²⁾の14日間を短縮して、前期⁴⁾と同じ要領で、該当ラウンドの期間を週末の金・土を2回含めた9日間として実施した。その方が集中的にでき、時間的な節約にもなるかと考えたからである。表2でみるように、今回の事例では第5日（火）から第7日（木）に書き込み数が集中し、受講者計でみると51のうち、この3日間で延37（72.5%）となっている。第5日の夕刻から講義があり、その前後に院生自習室から打ち込んだため（たとえば表2のLの8回）もあるが、第6日と第7日にもそれぞれ6人、5人が書き込んでいる。個別的にみると、例えばNは第2日と第3日に「広場」への書き込みに参加しただけであり、一方Jは後半の第6日と第7日に書き込んでいる。またIは全期間を通して書き込んでおり、院生各自の生活状況から、9日間を通した多彩なばらつきがみられたのは興味ある現象である。今回のラウンドでは、各自の最低打ち込み

数を取りたてて提示しないことにした。院生各自の自主的な参画に任せるのもよいのではと考えたからである。この結果を個人別にみると前期の打ち込み状況と同じ傾向が指摘された。

(注24) 最低の打ち込み数が9日間で2である事実をどう評価するか、さらに条件を変えながら事例を蓄積していく必要があると考えている。筆者(HK)は全期間をとおして入力しているが、内容はその時の状況によっていろいろである。基本的には、前述したように、あくまでも院生相互間での問題提起と討論が主体であり、それを支援し盛り上げていくための書き込みであると理解している。

表3と表4から、時間帯別の書き込み状況を見ると、受講生8人合計では、前期⁴⁾と同様に21-24時が31.9% (61のうち22)と最も頻度が高くなっている。また該当ラウンド(表3)に限定してみても、8人中5人が最低1回はこの時間帯に打ち込んでいる。有職者で家庭生活との両立課題を考慮に入れると、夜間のこの時間帯を活用するのが、最も都合がよかったことが、容易に理解される。このほか対面授業に参加するため、長距離通学(この事例では8人中3人が該当)の手間が省け、非同期型IBDL方式の利点が有効に活用されていることがはっきりしている。筆者(HK)の場合は、6-9時の時間帯が55.6% (27のうち15)、つづいて21-24時の時間帯が29.6% (27のうち8)で、両者をあわせると85.2%となっている。朝、大学研究室に出勤直後にチェックする場合と、帰宅してから就寝前にもう一度チェックする場合にほぼ限定されているのは、筆者の生活リズムではこれらの時間帯に定期的に「広場」を覗いて、必要な場合に書き込みするのに都合がよいためである。また大学研究室と自宅の双方のPCとも「広場」へのアクセスはウインドウズの「お気に入り」に登録し

てあり、それほど負荷を感じないで対処できたと自覚している。

3. 授業アンケートの結果から

後期semesterで分担した2科目のうち、受講者が8人の「看護研究方法Ⅱ」について、「広場」での問題提起・討論が終了する直前(8日目の金曜)、メーリング・リストを使ってA4判2枚にまとめた「授業アンケート」をeメール添付で送信した。翌週水曜には、8人の回答が一括して、とりまとめを依頼した院生から筆者宛に転送されてきた。この方式は、匿名性を確保する目的でIBDL方式の試用を開始した2001年度前期¹⁾から採用しているもので、特別の支障をきたすことはなかった。この8人分の回答は、授業アンケート用紙の最後に「参考のために、全員の回答をそのまま転送いたします」と明記したように、折り返し参考資料として再びメーリング・リスト使用のeメール添付で再転送した。この作業は、これでIBDL方式による分担授業がすべて終了したことの合図でもあり、同時にほかの7人の回答を開示して参考に供する目的をもっている。明らかな誤字の訂正と句読点の付け方を一部修正したほか、すべて原文のまま本稿に掲載している。

前年度後期の授業アンケート²⁾では、そのQ4で「前期のⅠ(必修)と後期(選択)のいずれも、『インターネットを活用した遠隔授業方式』を試用しましたが、現在の時点で、これからの大学院教育の在り方を考慮したとき、あなた自身は、この方式をどう判断しますか?」(2肢選択)と設問し、受講者8人のうち5人が「来年も続けて試用する価値がある。(受け入れることができる)、2人が「従来通りの教室で授業を行うべきだ。(受け入れることができない)」、残る1人は未回答であった。今年度前期

の授業アンケート⁴⁾では、Q4で「あなた自身の生活環境を前提としたとき、この方式をどう判断しますか？」（2肢選択）と設問し、受講者8人全員が「原則として受け入れることができる」と回答している。こうした経緯をふまえて、本稿で報告するIBDL方式による分担授業については、受講者全員が、この方式を「原則として受け入れている」ことを前提としており、あらためて同様の質問を授業アンケートに組み入れなかった。

まずQ1では、2回目の経験となる後期での「eラーニング」を経験して、「最も印象深かったこと」をひとことでコメントしてもらった。具体的な内容は、前述のようにさまざまであった。中には「いつでもできる便利さと、だからこそ、後回しになってしまうこともあること、（中略）自宅からのeラーニングは、いろいろなしがらみに邪魔されることが多く、夜中を待っている間に眠ってしまっていて困りました」③、「今回は、忙しく、なかなかアクセスできませんでした」⑤のような回答もあったが、ほかは概して、IBDL方式の経験を具体的なし肯定的に受け止めていることがコメント内容から推測された。

Q2では、この分担授業から、何か得たものがあるかどうか（2肢選択）を設問した。前期⁴⁾にも、同様の質問（注36）をしたところ、「かなり修得できたと思う」（4人）と「修得できなかったと思う」（4人）に分かれたが、後期では8人とも「修得したものがある」と回答した。具体的な事項は、8人8様であり、その中で「論文の構成を書くことが、論文の全体を理解し、クリティークするには、とても参考になることが理解できた」①、「課題の模式図を書くことによって研究の全体がわかりました」②、「模式図を書く際に、いろいろな条件に曖昧な点が

あったので、みなさんの意見が伺えたこと」⑤と、課題B（注22）に取り組んだ体験やそれに関連した「広場」上での討論から修得したのものがあるとの指摘が注目された。このほか「量的な研究がこんなに奥深いものだとは思いませんでした」③、「模式図作成の為に、パソコン技術が上がった」④、「論文を読む上で、どこに視点を持って読み進めていく必要があるのか」⑧など、量的論文1篇⁵⁾を精読し、その内容を各自で模式図にまとめ、それをeメール添付で全員に配布したあと、「広場」で討論する方式は、一定の教育効果を発揮したと判断してよいかもしれない。割り当てられた授業時間を勘案しながら、適当な論文（この場合は量的研究に関するもの）を選定し、その内容から演習問題を作成する場合、模式図作成を課し、そのあとで相互に比較させる教育手法は、IBDL方式においてもかなり有効ではないかと考えている。教育目標に沿った適当な論文の選定と、演習問題の作成は、これからのIBDL方式推進の担当者にとって、重要な実践課題であることが指摘できる。

Q3では、eラーニングの体験をふまえて、よかった点または改善すべき点、あるいは通常の対面授業と比較した場合の利点と欠点について設問した。よかった点として、「eラーニングでは、他の学生の意見を確認した後で、自分なりに調べてから発言できる」③、「夜間の自分の自由な時間を使って参加できることはありがたかった」④、「言葉で話すのと違い、（中略）自分自身の考えをもう一度確認できる点」⑤、「遠方の私にとっては、わざわざ出かけなくても学修出来るのでよかった。また、自分の空いた時間でゆっくりと学べることは良かった。『広場』などでの皆さんの意見を後に何度でも熟考することができた」⑥、「論文をじっくりと読み、それについて自分なりに調べて学習し

ていくことができた」⑦、「時間に関係なく、いつでも疑問を投げかけることができる。いろいろと調べてから、質問に答えることができる」⑧などが挙げられた。この中で最も多く挙げられた利点は、「広場」での質問に答えたりする場合、ゆっくり検討する時間的余裕があることであった。一方改善すべき点としては、「eラーニング後のclass conferenceがあるとよい」①、「先生にも討論の中に入れていただけたら」②、「中期と最終ぐらいには、学内での授業を確保した上でのディスカッションが必要」③、「セキュリティと、プライバシーについてが今後の課題」⑤、「討論が十分に行われなかった。(中略)『eラーニング』という方法の中で、意見交換・討論ができる改善が望まれる」⑦などが挙げられた。IBDL方式だけでは不十分なので、できれば1~2回通常の対面授業を補足してほしいとの提案があるが、割り当て時間(該当科目では4コマ8時間)を念頭に置くと、それは担当者と受講者双方にとって、むしろ過重負担になると判断することもできる。仮に2単位30時間あるいは1単位15時間の割り当ての場合には、こうした対面授業を追加する意義があるかもしれない。さらに事例を加えながら、割り当て時間に見合った教材・演習問題の選定・開発を進める一方、その限界を補う意味での対面授業追加の是非を検討することは、それなりに意義があると考えている。

また「セキュリティとプライバシー問題」は、IBDL方式の推進に伴う重要課題であることは間違いないが、ただ項目を挙げているだけで具体的な説明がなされていないので、はっきりしたことは不明である。もし、この問題提起が、「広場」での書き込み内容が、その気になれば眺めることができる状況にあることを指しているとするれば、もちろん検討課題としてあら

ためて取り上げるべきものである。事前にこの点を検討した結果、まだ試用段階にあり、この時点で、すぐ受講者に「広場」にアクセスするための特定のユーザー名とパスワード設定する程の必要はないと判断した経緯がある。その根拠は、アクセスするための手順が少し煩雑になることのほか、学内LAN上で興味にある者(たとえば同僚の教員、2年次大学院生、あるいは学部学生など)が、「広場」での討論内容を閲覧しても、特別問題は起こらず、むしろ関係者の注意を喚起する機会ともなると考えたからである。しかし、担当者と受講者にアクセスを限定するため、そこにもう一つの関門(ユーザー名とパスワード)を挿入することは、技術的にはとくに問題はないので、仮にそうする必要性が強く認識されるような状況になれば、それに適した対処策を講じることを再度検討することになる。

おわりのQ4では、「看護系大学院(修士課程)におけるeラーニングの開発の必要性」について1年間の受講経験をふまえて、自由にコメントしてもらった。受講者は、それぞれの文脈で、eラーニング導入の意義について、以下のように、

「eラーニングは、今後さらに活用されることを望みます」①、「いまやIT時代ですから、教育界でも今後ますますこのような教育方法がとられていくと思います」②、「『仕事を止めることが出来ない人にも学ぶ機会を』とするには、eラーニングは意義深いと思う」③、「自宅にいながらの、大学院レベルでの討論に参加できる事はありがたいと思った」④、「華表先生が実施されたこのような授業形態は、これから益々増えて行くことが予想されます」⑥、「1年間『eラーニング』の授業に参加し感じたことは、インターネットを使用し、いつでもどこで

も参加できるということの便利さ以上に、参加するためには自己学習がいかに必要かということである」⑦、「実際に様々な利点と欠点はあるが、遠距離や、有職者にとって時間の都合を無理につけなくてもよいということは、非常にありがたく、授業に参加もしやすいと考える」⑧、と記している。

以上のコメント内容から、看護系大学院（修士課程）で1年間受講経験したeラーニング（ここでは非同期型IBDL方式を指している）の意義、将来性を自らの体験をふまえて、受講者のほぼ全員が、肯定的に受け止めていることが、明確に把握できたと判断された。

しかし、このIBDL方式には利点とともに欠点（運営上の不備、限界などの指摘を含む）もあり、これについてはQ3、Q4でいくつか指摘された。たとえば、「eラーニングだけでは、まだ討議が中途半端であったり、関心がむかないことにはあまり反応がなかったりする」Q3①、「面接のような人間関係を有する討議とその深まりや満足感（情緒的問題にもなりますが）にやや欠けるような気がします」Q4①、「統計学や研究の基礎ができていない学生にとっては、このような学習方法は適しているかもしれません。しかし、私のように能力に差があると十分に理解できないし、消化不良を起こしてしまいます」Q4②、「でも、この方法だけではすべてを学ぶことは難しい」Q4③、「大学院で華表先生の講義を受けたという実感が持てないのは、大学院に入りながら、残念な気持ちがある」Q4④、「インターネット上の仮想空間を使って、なにを学ぶかについては、さらに熟慮されていく必要があると思う。また、書き込み以外の方法も利用できると思うので、他のリソースについても、検討の余地があると感じている」Q4⑤、「疑問点など、すぐに口頭で確認したいこと

が、聞けない。また、どうしても文章にするとニュアンスが異なることがある」Q3⑥、「討論が十分に行われなかった。問題提起があっても、それについていろいろな意見交換が行われることを期待していたが、問題意識だけで終わってしまっているものが多かった」Q3⑦、「他の人と同様の疑問を持った場合、その疑問が先に出ていると書き込みが少なくなったりする可能性はあると考える」Q4⑧などがある。これらの指摘のすべてに、IBDL方式の利点を生かしながら改善策を講じることは不可能にしても、総合的な視点から、こうしたコメントがでってくる背景要因を整理し、担当者と受講者双方にかかる負荷量なども考慮し、全体のバランスを取りながら、常に工夫し、改善していくことが、これからのIBDL方式の推進、発展のために不可欠な作業と考えている。

4. 今後の検討課題

おわりに非同期型IBDL方式を定着させていく上で、対処すべき主なる問題点、課題をあらためて列挙し、それぞれ若干の考察を加えることにする

(1) 学内LANの管理とセキュリティ対策

非同期型IBDL方式を円滑に進めるための前提条件は、いうまでもなく学内LANが整備され、その管理体制ができていことである。本学の場合、電算センター（常勤2名）が責任をもち、定期的な保守管理業務は外部業者に委託している。また技術的な相談と支援も担当しており、筆者の学内HPに、 Semesterごとに更新している累積アクセス・カウンターや、このIBDL方式で活用している「電子掲示板」（注23）は、いずれも電算センターに依頼して、その都度設置してもらった。こうした意味でも、専門的知識と経験が乏しいままIBDL形式による授業

の試用を始めた筆者(注37)にとって、電算センターとの密接な連携維持は不可欠である。

システム全体のセキュリティ対策として、電算センターではシマンテック社と契約を結んでおり、学内LANに常時接続しているPCは、Norton AntiVirusソフトの活用が可能である。しかし、ノート型PCや自宅のデスクトップ型PCのセキュリティ対策は、各自の責任で対処することになる。

そのため、担当者(注38)とともに、受講者が自宅または職場でIBDL方式のために使用するPCのセキュリティ対策も同様に重要であり、今回の事例では2002年度の入学時直後のオリエンテーションの際に、注意を喚起する目的で、各自の責任でコンピュータウイルス対策に配慮する必要性を強調した。また7月下旬に筆者の学内HPに掲載したオリエンテーション資料でも、再度この点に留意するように記した。

このほか、突発事故が起きた場合には、なるべく早い時期に担当者(HK)あるいは直接電算センターに連絡し、相談するように手順を説明したが、今後ともIBDL方式の授業を進めていく上で、コンピュータウイルス対策を含めた「セキュリティ対策」を最優先課題として位置付け、そのための手順をマニュアル化してオリエンテーションの際に説明しておくことが大切である。

(2) 担当者の役割

担当者に課せられた仕事としては、まず教育目的(注5、注17)、学修目標(注6、注18)を明確にする作業がある。それと同時に、非同期型IBDL方式に適した教材の選定とその使い方の検討が重要である。筆者の事例では、最初(2001年度前期)¹⁾は、WHO欧州事務局のHPに掲載されていた教材¹²⁾をそのまま借用して実施した。その経験をふまえて、後期²⁾では看護

領域の量的研究の英語論文1篇⁵⁾を選定し、前期に使用した教材¹²⁾の演習問題に倣って、試作した。(注39)

さらに具体的な授業日程を編成する段階では、担当者自身の業務全体からみて、特定の時期に過重の負荷がかからないような配慮が必要である。同時に、有職者が大多数を占めている場合には、受講者側の事情を勘案することも不可欠であり、オリエンテーションで授業の流れと基本的操作方を説明したあと、一定の準備期間をおいてから、電子掲示板やeメールを活用したIBDL方式による授業を始めることになる。今回の事例では、分担した2科目の授業を時期的に分離し、まずeメールのみを使用した「看護管理論」、つづいて電子掲示板を中心とした「看護研究方法Ⅱ」を行い、12月中旬にはすべての日程を終了することができた。そのためには、後期の場合には、受講者が夏期休暇中から準備に取り掛かることができるような日程編成が必要となってくる。Q4でのコメントに、「1年間『eラーニング』の授業に参加し感じたことは、インターネットを使用し、いつでもどこでも参加できるということの便利さ以上に、参加するためには自己学習がいかに必要かということである。(中略)学習者の意識によって学びの深さが変わってくる学習方法であると感じた」⑦、との的確な指摘があるが、受講者が「自己学習」できる十分な時間的余裕を提供するためにも、特に後期の授業では夏期休暇に入る時点で、使用する教材と課題内容を含めたオリエンテーションを提示することが大切と考えている。

大学院レベルの教育では、教室でのセミナー方式の従来型授業と同様、非同期型IBDL方式による授業でも、一定のテーマを分担した受講者(大学院生)の問題提起とそれをふまえた討論

が主体であることは変わらないが、担当者の役割としての介入の仕方は、対面授業のようにその場の雰囲気から臨機応変に対応することは出来ない。しかも時間的なずれもあるため、担当者の取るべき適切な対処方法については、再検討する余地が大いに残されている。授業アンケートをみると、「討議が中途半端であったり、関心が向かないことにはあまり反応がなかったりする」Q3①、「何が本当に正しいのかわからないので、先生にも討論の中に入っただけだったらより正しいものになるのではないか」Q3②、「討論が十分に行われなかった。

（中略）問題にも重なりがあり、意見を述べるだけで討論にまでは至らなかった」Q3⑦、などの指摘もあり、院生相互の問題提起と討論を基本としながらも、担当者としての役割はどうあるべきか、どの時点で「広場」への書き込み（介入）をするべきか、さらに事例を積み重ねながら、試行錯誤する必要があると考えている。

（3）受講者側の前提条件

非同期型IBDL方式を推進する上で、受講者側の前提条件は、まず第1が自宅または職場でインターネット接続のPCを使用できることである。今回の受講者8人はすべてこの要件を満たしており、授業アンケートに「パソコンの機種が古いせいで、うまく作動出来なかったところもあった」Q3⑥とのコメントがあったが、むしろeメールを頻繁に使う場合、重要なのは各自が使用するPCの「セキュリティ対策」についての認識と実際の対処状況である。第2はIBDL方式を受講する上での基本的操作技術を修得していることである。具体的には、eメール添付による送付方法、電子掲示板への書き込み操作ぐらいで、そのほか、今回の事例では、デスクトップ上の画面のコピー（注21）、模式図の作成（注22）な

どの操作技術が要求された。電子掲示板「広場」への書き込みは、前期のオリエンテーションの際に実際に操作する機会があり、それで十分と考えている。

むしろ受講者8人に技術的な差が見られたのは、課題A（注21）の提出方法で、双方向性多肢選択問題のデスクトップ上の最終画面をコピーし、それをeメール添付で提出するときであった。うち1人はFaxで提出し、2人は直接研究室に持参した。筆者が要求した通りに最終画面をコピーして、eメール添付で提出したのは3人（A4判横長で大きくコピーしたのは1人）だけで、残り2人はワード形式に変換したものをeメール添付で提出した。（注33）しかし課題Aの本質は、こうした「情報リテラシー」関連の操作技術ではなく、看護領域の量的研究に関する基本的知識の修得と確認にあることに変わりはない。

授業アンケートに「模式図作成のために、パソコン技術が上がった」Q2④、とのコメントがあったが、課題B（注22）の模式図も8人8様で、そこから「他の学生の模式図を見て自分の足りないところや誤りに気づくことができました」Q2②、のような機会もあるわけで、結局IBDL方式を受講する上で必要な前提条件は、「eメール添付による送付」と「電子掲示板への書き込み」の2つの基本的操作と各自が自宅または職場で使用するPCの「セキュリティ対策」への関心度と実践に集約できる。（注40）

むしろ、これらの基本的要件を満たした上で、実際に「広場」での問題提起と討論の輪の中に、積極的に参加していこうとする意欲が大切であり、対面授業とは違った非同期型CDDL方式の状況に合致した教育方策の探求・開発が担当者に求められている。一方、受講者側には、あらかじめ「インターネットでの討論は最終的

な場であり、それまでには討論に参加できるように、自分なりに学習し、準備しておかなければならない。それができていなければ、この方法による学びは中途半端なものになる」Q4⑦とのIBDL方式のもつ特徴を自覚した学習姿勢がつねに要求される。

以上今回の事例をふまえながら、若干の問題点を取り上げて考察した。

総括

2001年度から本学大学院に「長期在学コース」が導入され、長距離通学の有職者が入学したことを契機に、筆者の分担する授業で、電子掲示板を活用した非同期型IBDL方式の試用を決意し、本稿の報告で延4セメスターの経験を持つことになった。受講対象者は、2001年度入学の9人（うち1人は後期に休学）と2002年度入学の8人である。

本稿では、2002年度後期の「看護研究方法Ⅱ」を受講した8人からの授業アンケートの回答内容を詳細に検討した。その結果、まだ十分とはいえないが、非同期型IBDL方式が受講者側から、原則として肯定的に受け止められていることが判明した。その一番大きな要因は、受講者の大多数が有職者（その一部は長距離通学者）から構成されていることである。本学の置かれている地理的状況と交通事情（注31）を勘案したとき、近い将来非同期型IBDL方式に代表されるeラーニングを、とくに大学院レベルの授業に積極的に取り入れていくことが必要かと判断される。

本稿で報告した事例は、本学のみならず、わが国のこれからの看護教育（とくに大学院修士課程）のあり方を考える上で、多少とも参考に値するものがあるかと、筆者は考えている。

謝辞：2年間にわたった非同期型IBDL方式の試用に際して、技術的な支援を惜しまれなかった本学電算センターの各位に深謝する。また側面からご協力いただいた大学院研科と学部の関係者各位、受講者として率直なコメントをいただいた2001-2002年度入学の院生各位に深謝する。

注1) 聖隷クリストファー大学大学院学則第5条（修業年限および在学年限）：本大学院の修士課程の修業年限は2年とする。ただし、長期在学コースの修業年限は3年とする。

注2) 2001年度の「看護管理論」受講者3人は、いずれも通常の2年制の院生であったため、従来通り教室での対面授業（セミナー形式）で実施した。

注3) ちなみに2001年度の新入生9人（全員女性）の平均年齢は36.2才で、最低22才から最高51才であった。うち4人が有職者（看護教育3人、看護業務1）、5人が長期在学コースを希望した。1人は中国地方内陸部からの長距離通学者。

注4) この時点では、前期に実施した「看護研究方法Ⅱ」のIBDL方式による分担授業が終了しており、また後期の各授業科目の受講登録が確定していた。夏期休暇に入る時期でもあり、筆者の担当する2科目（いずれも分担授業）についてのオリエンテーション資料を「大学院担当科目のページ」に掲載するのに適当な時期と判断された。

注5) 教育目標（GIO）：欧州地域における最近の「看護関連領域の動向」英文資料（WHO/EUROのHP上に掲載されているもの）を素材として、その自主学修と討論をとおして各自の興味範囲を拡大する機会を提供する。

注6) 学修目標（SBO）：自分の責任で、WHO/

EUROのHPから、最近の看護関連資料を検索して、その中から自分の興味のあるものを1篇選定し、内容の検討、レポートのまとめ、e-Learning方式による討論などによって、自ら選定した主題についての理解を深めていくことができる。

注7) 具体的には、(<http://www.who.dk/Nursing/NursConf/English/document.htm>)を提示した。また背景にある基本的文献として、Vienna Declaration on Nursing (1988)、Munich Declaration on Nursing (2000)、European Health 21 Target 18 Developing Human Resources for Health (2000)の3篇を列挙した。

注8) 2000 - 01年度の分担授業（教室でのセミナー方式による）でも、同じくWHO/EUROのHPに掲載されている看護・助産領域の各種文献から、受講者の興味にあるものを1篇以上選定して報告させ、討論するような方式を採用した。

注9) 今年度の受講生は2人とも遠隔地から通学することも勘案して、分担授業は「Eメール」を活用した遠隔授業方式（eラーニングの一種）で行います。先に掲示した「オリエンテーション」とは違って、電子掲示板（大学院生の広場）は使用いたしません。（看護研究方法Ⅱとの混同など、煩雑さを避けるため）、と記した。

注10) 担当者と受講生2人で「メーリング・リスト」を使って、適当な時期に意見交換などをいたします。1回目：10月15日（火）～10月21日（月）、2回目：11月4日（火）～11月11日（月）（なお、担当者のメールは大学のみです。原則として土曜・日曜はアクセスいたしません。まとめて月曜に回答いたします）各自各ラウンドで最低1回は話題提供すること、と記した。

注11) Eメールによる意見交換とレポートの内容などを総合して判定する、と記した。

注12) 実施しない。若し感想などあれば、レポートの末尾に記すようにして下さい、と記した。

注13) 各自が使用するPCの安全管理（ウイルス管理など）には、万全の注意をお願いいたします。（なにか事故がありましたら、早急に連絡して下さい）、と記した。

注14) 課題2：夏休み前に提示した「WHO/EURO」の該当資料から、適当なものを選択して、それをもとにレポートをまとめて、Eメール添付で担当者に提出する。締め切り：11月12日（火）正午（A4判横書き、枚数自由）、と記した。

注15) 課題1：厚生労働省HPの委員会ページに掲載されている「新たな看護のあり方を考える委員会」（看護課所管）の資料・議事録を閲覧して、それぞれの感想・意見交換をする（とくにレポートにまとめる必要はない）、課題3：担当者が配布した別冊を閲覧して、いまヨーロッパの看護教育・在宅ケアで、どんな動きがあるか意見交換する（これもとくにレポートにまとめる必要はない）担当者は、10月26日（土）に日本社会福祉学会で口頭発表する予定であるが、後半のときの話提供として、その様子などを報告する、と記した。

注16) 例えば日本公衛誌47（2）「欧州連合加盟諸国における看護教育改革の課題 フランス・ドイツの事例をふまえて」（2000）、看護教育41（2）「アルテンフレーガー（ドイツ）の職務と日本語による表現 老人介護士か老人看護士か」（2000）、訪問看護と介護6（4）「フランスの在宅ケアにおける気管内吸引への法的対応」（2001）、公衆衛生65

- (10) 「フランスの在宅ケアと関連職種」(2001)、日本公衛誌49(5)「ドイツ連邦共和国の『老人看護法』制定をめぐる最近の動向」(2002)などの別冊を配布した。
- 注17) 教育目標(GIO)：前期の「看護研究方法Ⅰ」での学修体験をふまえて、量的研究を中心とした基本的事項を一連の研究過程の中に位置づけながら、系統的に理解する。
- 注18) 学修目標(SBO)：指定されたテキスト及び論文の検討を通して、主として量的な看護研究で用いられている基本的手法の知識と適用方法を、自主学修と電子掲示板上の討論によって身に付けることができる。
- 注19) 文献5を素材として、A4判3枚にまとめたもので、前年度の分担授業²⁾に使用したものと同一である。演習問題(延20問)は論文の流れに沿って、文献的検討、標本の特性、結果、考察、文献、まとめから構成されている。文献2の図7を参照。
- 注20) 前年度の場合と比較して、「看護研究方法Ⅱ」の分担授業を円滑に進める上で、必要と判断されたときには、電子掲示板「広場」での書き込みとあわせて、メーリング・リストを使ったeメールによる連絡をしばしば併用した。
- 注21) 課題Aは、前年度の課題1に対応するもので、これに使用した問題集は稲垣ら⁷⁾の開発した「双方向性多肢選択問題」のソフトに若干の変更をおこない、そこに文献8に掲載されている問題集から、量的研究に関連した正しいステートメント41問と誤ったステートメント45問を英文のまま転用して作成したものである。この問題集を「大学院担当科目のページ」の所定箇所に掲載し、連続50問行って正解率80%以上の基準に到達した画面をeメール添付、あるいはコピーして提出することを課した。
- 注22) 課題Bは、前年度の課題2に対応するもので、教材とした論文⁵⁾を精読し、論文内容をA4判用紙1枚の範囲内で、模式的にまとめる設問である。この課題Bの答えは、担当者宛にeメール添付で提出してもらい、受講者全員の模式図をあらためてメーリング・リストを使ってeメール添付で全員に転送し、それを比較しながら「広場」での討論に活用することとした。
- 注23) 前年度と同じく、<http://rose.ruru.ne.jp/dst/default.asp>よりダウンロード。
- 注24) 前期の「看護研究方法Ⅰ」での書き込み数(第1・第2ラウンド合計)(文献2の表3参照)と個人別に照合すると、I:F, J:C, K:H, L:B, M:E, N:A, O:G, P:Dとなり、比較的書き込みの多い院生と少ない院生が大まかに区別される。
- 注25) SASE: Smoking Abstinence Self-Efficiency Scaleの略語、測定用具の一種。
- 注26) 設問: 看護研究における量的研究で、留意すべき点を一つ以上挙げ、その根拠について自由に考察せよ。(この場合、教材として使用したジョンソン論文の事例をふまえ、引用することもできる。ほかの論文からの引用や自分の経験をふまえた書き方をしてもよい。) レポートの長さはA4判横書き1~2枚程度、提出方法は担当者宛メールに添付。
- 注27) A4判2枚にQ1~Q4で構成。
- 注28) 文献9のp24図1-24参照。本稿では、「eラーニング」の用語を総称として使用する場合と、便宜上その1形態である非同期型IBDL方式を指して使っている場合とがある。
- 注29) 一般にはWBT(Web Based Training)の用語が使われている。本稿で使用しているIBDLと同義と理解してよい。

注30) 新入生は、1998年度7人（全員女性、うち1人中途退学）、1999年度5人（男性1人、うち女性1人中途退学）、2000年度4人（全員女性）であった。

注31) JR浜松駅前ターミナルから本学に最も近いバス停までの路面距離は12.7Km。某私鉄経営のバスが、昼間はほぼ10分間隔で運行されているが、ラッシュに遭遇すると1時間以上かかるときもある。

注32) 遠隔教育HP：<http://enkaku2.niph.go.jp/main.html>。以下の7コースが開設された。環境保健（募集人員30名、以下同様）、疫学概論（15名）、厚生統計特論（20名）、生物統計学（30名）、保健活動・事業の評価（15名）、口腔保健（10名）、EBHP（Evidence-Based Health Policy）のための文献レビュー方法（20名）。

注33) 課題Aの提出については、eメール添付が5人、直接の提出が2人、Faxが1人であった。またeメール添付5人のうち、カラー画面が横長で1人、縦長で2人、残る2人のものは白黒であった。一様でなかったのは、受講者が使用したPCの機種の違いのほか、筆者が意図した仕様（横長のカラー画面）のプリントアウト手順の理解が十分でなかったことが原因と考えられた。

注34) 文献4)の表1参照。はじめに、教材準備期間、第1ラウンド、課題レポート作成期間、第2ラウンド、おわりに（以上6グループ）。

注35) 表5から試算すると、1案で $(7+8+2+9+8+15)/24=2.0$ 、2案で $(8+2+9+8+15)/17=42/15=2.8$ 、ほかにコメントのあった書き込みの割合(%)=70.2などが考えられる。

注36) 文献4、Q2：あなた自身は、この分担授業を通して『看護研究方法』の基礎（とされる）事項を修得できたと考えていますか？（2

肢選択）。

注37) 浜松市医師会ウイークリーのNo.1487（2001年1月1日）「デジタル時代の初夢」、No.1536（2002年1月1日）「IT時代へのスタート」、No.1585（2003年1月1日）「ネットワーク時代の夜明けを生きる」を参照。

注38) 筆者が自宅からアクセスしているPCには、2001年12月にNorton Systemworks2002をインストールし、1年後にNorton Internet Security2003をインストールした。

注39) 文献1の表1と文献2の図7を参照。

注40) 過去2年間の非同期型IBDL方式試用では、音声や動画は取り扱わなかった。近い将来学内LANがブロードバンド化され、それに対応して担当者・受講者が学外からアクセスするPCがブロードバンド化された状況では、音声、動画あるいはビデオを適宜に取り入れていく可能性がかなり高いと予測される。その時点での受講者側に要求される前提条件は、当然見直される筈である。

文 献

- 1) 華表宏有(2002)大学院授業科目における「インターネット活用による遠隔授業方式」試用の事例、看護教育41(7)、555-559
- 2) 華表宏有(2002)学内HPを活用した授業方策の試用とその評価、聖隷クリストファー看護大学紀要No.10、115-136
- 3) 華表宏有(2002)看護系大学院(修士課程)の分担授業でのIBDL方式試用の事例、JDLA学術講演会、25-28、日本ディスタンスラーニング学会
- 4) 華表宏有(2003)大学院授業科目における「インターネット活用による遠隔授業方式」の継続試用とその評価、看護教育42(掲載予定)

- 5) Johnson, Joy L., Budz, B., Mackay, M & Miller, C. (1999) Evaluation of a nurse-delivered smoking cessation intervention for hospitalized patient with cardiac disease, *Heart & Lung*, 28 (1), 55-64
- 6) Polit, D.F., Cheryl Tanato Beck and Bernadette P. Hungler (2001) *Essentials of Nursing Research Methods, Appraisal and Utilization* (5th edition), p.524, Lippincott, Philadelphia
- 7) 稲垣健治、鈴木恵理子、黒野智子、藤本栄子、益田美穂子(2001) ネットワークコンピュータの看護教育への有効利用 多肢選択問題プログラムの開発と利用、看護教育、42(3)、220-224
- 8) Polit, D. F., Cheryl Tanato Beck and Bernadette P. Hungler (2001) *Instructor's Manual and Testbank to Accompany Essentials of Nursing Research Methods, Appraisal and Utilization* (5th edition), p134, Lippincott, Philadelphia
- 9) 先進学習基盤協議会(ALIC)編著(2002) eラーニング白書2002/2003年版、p.375、オーム社
- 10) Myrna L. Armstrong (2001) Distance Education: Using Technology to Learn, In Virginia K. Saba & Kathleen A. McCormick (ed.), *Essentials of Computers for Nurses Informatics for the New Millenium* (3rd edition), McGraw-Hill, New York, 413-425
- 11) 島崎道子(2002) eラーニングと看護への応用、臨床看護、28(9)、1386 - 1394
- 12) Wilson, K. & Butterworth, T (ed.) (2000) *Research awareness in nursing and midwifery: a workbook* (ISBN92-890-1181-5), p.78, WHO/EURO, Copenhagen